文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しませる外国語活動の指導の工夫
― 日本語と比較させて英語の音声や文字を認識する活動を取り入れた単元づくりを通して ―

呉市立呉中央小学校　細川　裕香

研究の要約

本研究は，日本語と比較させて英語の音声や文字を認識する活動を取り入れた単元づくりを通して，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しませる外国語活動の指導の工夫について考察したものである。文献研究から，英語の文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しませるには，英語の読み書きの土台となるアルファベットの文字の認識と英語の音声に対する気付きを高めることが必要であり，そのためには，日本語と英語を比較させることが有効であることが分かった。そこで，本研究では，日本語と比較させて英語の音声や文字を認識する活動を取り入れた単元づくりを行った。その結果，児童は英語の音声や文字を認識し，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむことができた。このことから，日本語と比較させて英語の音声や文字を認識する活動を取り入れた単元づくりは，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しませることにおいて有効であるといえる。

キーワード：文字認識　音声認識　日本語と比較

Ⅰ　主題設定の理由

外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（平成28年）では，小学校高学年において，コミュニケーションの目的を理解し，見通しをもって目的を実現するための言語活動を通して，聞いたり話したりするとともに，読んだり書いたりすることに慣れ親しませ，コミュニケーション能力の基礎となる知識・能力を育成することが示されている。

平成26年度小学校外国語活動実施状況調査によると，中学校第１学年の生徒の８割が，小学校で英単語や英文を読むことや書くことをもっとしておきたかったと回答している。また，平田和人（2008）は，外国語活動では文字に触れる程度の指導があったとしても必ずしも丁寧に指導されてきている訳ではないと述べている。つまり，小学校外国語活動における文字の扱いは，アルファベットの大文字及び小文字に触れる程度で，中学校の「読むこと」「書くこと」の学習との差があり，音声から文字への学習の接続が十分でないといえる。所属校の第５学年の児童に行った外国語活動に関するアンケートでは，文字を読むこと，文字を書くことに興味があると回答した児童はそれぞれ80％おり，文字に対する興味・関心が高い児童が多いことが分かった。これらのことから，小学校外国語活動において，児童の文字への興味・関心を高めながら，文字を読んだり書いたりすることへの発達の段階に応じた指導が必要であると考える。

そこで本研究では，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しませるために，第５学年のアルファベットを扱う単元において，英語の音声や文字を認識する活動を取り入れた単元づくりを行う。具体的には，文字を読んだり書いたりする必然性が生じる活動を単元のゴールの活動として設定し，ゴールの活動に向けた各時間の活動において，日本語と比較させて日本語と英語の音声の違いに気付かせながら，英語の音声や文字を認識し，英語の音声と文字の関係に気付くことができるようにする。このような単元を通して，児童の文字への興味・関心を高めながら，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しませることができると考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

１　文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しませる外国語活動について

(1) 文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむとは

次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のま

とめ（平成28年，以下「審議のまとめ」とする。）には，小学校の外国語教育における改善・充実において，「教科として位置付ける際，単に中学校で学ぶ内容を小学校高学年に前倒しするのではなく，身近なことに関する基本的な表現による各領域の豊かな言語活動を行うため，発達の段階に応じた『読むこと』，『書くこと』に慣れ親しみ，積極的に英語を読もうとしたり書こうとしたりする態度の育成を含めた初歩的運用能力を養うこととする。」[1)]と示されている。また，外国語等における小・中・高等学校を通じた国の指標形式の目標（イメージ）たたき台の「読むこと」には，ごく身近にあるアルファベットの文字を識別し，発音することができるようにすることや，音声で十分に慣れ親しんだ，ごく身近で具体的な事物を表わす単語を見て，その意味を理解できるようにすることが示されている。さらに「書くこと」には，目的をもってアルファベットの大文字と小文字を活字体で書くことができるようにすることや，例文を参考にしながら，音声などで十分慣れ親しんだ語句や文を書き写すことができるようにすることが示されている。

そして，音声に慣れ親しむことについて兼重昇ら（2008）は，定着を図ることでなく一部の単語が分かり喜びを感じること，西尾由里（2015）は，完全ではないがインプットされた単語や表現を使うことと述べている。したがって，慣れ親しむとは，定着を図ることではなく完全ではないがインプットされたことを使うことと捉え，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむことについても同様と考える。

そこで，本研究における文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむとは，身近にあるアルファベットや，聞き慣れた身近で具体的な事物を表す単語を見て，完全ではないが推測して読んだり，書き写したりすることであると考える。聞き慣れた身近で具体的な事物を表す単語とは，意味を理解している単語とする。

(2) 文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しませるには

「審議のまとめ」では，音声から文字への学習に円滑に接続されていない等の課題を踏まえ，小学校外国語教育において「アルファベットの文字や単語などの認識」「国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き」など，言語能力向上の観点から，言葉の仕組みの理解などを促す指導を行う必要があることが示されている。また，文字の読み書きの指導についてアレン玉井光江（2013）は，英語の読み書きの土台となる，アルファベットの知識と英語の音に対しての気付きを高める指導を行うことが重要であると述べている。そして，アルファベットを理解するということは，文字の形とその呼び方である名前を一致させることを意味すると述べ，英語の音に対する気付きとは，話されている言葉がどのような音から成り立っているかを理解することであると述べている。

これらのことから，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しませるには，単語の音声がどのような音から成り立っているかという英語の音声を認識させることと，アルファベットの文字の形と名前を一致させてアルファベットの文字を認識させることが必要であると考える。

なお，本研究は，英語の文字に初めて出合う単元であるため，始めに読み書きの土台となるアルファベットの文字を認識させ，それから，英語の音声を認識させるようにする。

２　日本語と比較させて英語の音声や文字を認識する活動を取り入れた単元づくりについて

(1) 日本語と比較させる意義

教育課程企画特別部会　言語能力の向上に関する特別チーム（第１回，平成27年10月22日）における主な意見（平成27年）では，「小学校段階の国語と外国語の連携に関して，言語要素的な部分は両者を比較すると，共通点や異なる点に気付くと思うが，それを教師が教えてしまうのではなく，子供が国語の学習を通して英語との比較をしたり，英語の学習を通して国語との比較をしたりできるような言語活動を，具体的に組むことが必要。」[2)]と示されている。また，卯城祐司（2016）は，外国語活動は言葉への気付きが大切であり，児童に実際に聞かせることで，日本語と英語の音声の違いに気付かせることの重要性を述べている。

したがって，日本語と英語を比較させることで，児童が言葉の違いによる面白さを味わい，英語の音声や文字への興味を育てることができると考える。また，音声面の違いに気付き，その気付きが，英語の音声を認識することにつながると考える。

これらのことから，日本語と英語を比較させることは，児童が英語の音声や文字を認識するために意義があると考える。

(2) 日本語と比較させて英語の音声や文字を認識する活動

ア　日本語と比較させて英語の文字を認識する活動

中村典生（2008）は，個々のアルファベットの認識について，話すことよりも聞くことが優先されるという考えに基づいて，聞いて分かるようになる指導の後に，音声化できるようになる指導を行い，アルファベットの文字が読めるようになった次は，アルファベットを書く指導を行うという指導の段階の有効性を述べている。

そこで，児童が英語の文字を認識することができるように，アルファベットを読んだり書いたりする活動を取り入れた活動を行う。本研究における英語の文字を認識する活動を，中村の述べる段階を基にまとめたものを表１に示す。

表１　本研究における英語の文字を認識する活動[1]

活動の流れ	活動内容
アルファベットの名前を聞いてその文字が分かる。	・名前を聞いてその文字を指す。（ポインティングゲーム） ・名前を聞いて文字カードを取る。（アルファベットカルタ）
アルファベットの名前を聞いてそれを発音する。	・隠れているアルファベットの名前をあてる。（アルファベットパズル） ・リズムにのってアルファベットの名前を発音する。（チャンツ） ・伝言ゲームの要領で，アルファベットの名前を伝える。（チェーンゲーム）
アルファベットの文字を見てそれを発音する。	・アルファベットカードを発音しながら順に並べる。（アルファベット順番並べ） ・欲しいカードを尋ねたり答えたりしながらＣＤ等の名前読みの言葉を集める。（名前読み言葉集め）
アルファベットの文字を見てその文字を書き写す。	・ビンゴシートにアルファベットを選んで書き写す。（アルファベットビンゴ） ・集めた名前読みの言葉を書き写す。（名前読み言葉書き）

これらの活動を行い，児童がアルファベットの文字の形と名前を一致させることができるようにする。

そして，アルファベットの文字の形と名前を一致させる際の重要な点として，アレン（2014）は，アルファベットの文字の形とその呼び方（名前）を学びながら，その呼び方（名前）の中にある文字の音を知ってその音にしっかり慣れ，発音できるようになることを挙げている。そこで，英語の文字を認識する活動の中で児童に，「エム」「エル」等の日本語化した発音と英語の発音を比較させて，アルファベットの名前の正確な発音を意識させる。正確な発音を意識させることで，アルファベットの名前の中にある音に気付かせ，英語の音声を認識することにつなげるようにする。

イ　日本語と比較させて英語の音声を認識する活動

畑江美佳（2015）は，英語は表音文字であるため単語や文を正しく読むためには，アルファベットをa[æ]，b[b]，c[k]等と音で読めなければならないがその音は教え込むものではなく，授業の中での多様な活動と組み合わせ，児童自身に獲得させたいと述べている。つまり，アルファベットには，名前とは別に音があることを児童に気付かせる必要がある。また，赤沢真世（2016）は，英語の音に対する丁寧な気付きのための働きかけを行って児童自身に気付かせ，その気付きを共有化し，学びの深まりを作り出すことの重要性を述べている。これらのことから，アルファベットの音を取り出して教え込むのではなく，児童に英語の音声を聞かせる中で，英語がどのような音で成り立っているかという気付きを促す活動を工夫する必要があると考える。

英語の音声への気付きを促す指導について，中村（2008）は，日本語の「子音＋母音」の音韻体系を英語に当てはめてしまわないようにするために，児童にローマ字読みと英語読みは違うことを示す必要があると述べている。その具体的な方法として，日本語化した語と本来の英語との音声的な違いを提示する方法を挙げている。このような日本語と英語の音声の違いについても教師が示すのではなく，児童に気付かせることが大切であると考える。さらにアレン（2013）は，英語の音声への気付きを高めるために，英語の音に親しむこと，始まりの音である語頭韻（onset）を使って英語の音と文字の関係に慣れること等の目標を示している。これらのことから，英語の音声を認識するためには，ローマ字読みと英語読みの音声の違いに気付かせた上で，アルファベットの音やアルファベットの音と文字の関係に気付かせていく必要があると考える。

以上のことから，本研究における英語の音声を認識する活動を表２に示す。

表２　本研究における英語の音声を認識する活動[2]

活動の流れ	活動内容
日本語と英語の音声の違いに気付く。	・外来語と英語の発音を，外来語のローマ字表記と英語の表記を見ながら比較する。
アルファベットの音を知る。	・聞き慣れた身近な単語の始まりの音を聞き取る。（始まりの音） ・文字を見ながらリズムにのってアルファベットの名前読みと音読みを言う。（アルファベットジングル）
アルファベットの音と文字の関係に気付く。	・単語の音声を聞いて，始まりの音に対応する文字を書き写し，意味とつなげる。（アルファベットリスニングクイズ） ・単語の始まりの音を意識して聞き，文字と絵が書かれたカードを選ぶ。（単語カルタ）

これらの活動を行い，児童が気付きをつなげて英語の音声を認識することができるようにする。

(3) 英語の音声や文字を認識する活動を取り入れた単元づくり

白井恭弘（2012）は，第二言語習得の効果的な学習方法について，学習者の動機付けを高めると同時に，その動機を具体的な学習行動につながるようにしていくことが大切だと述べている。また，直山木綿子（2013）は，外国語を用いてコミュニケーションの体験をさせることが求められる外国語活動においては，児童の興味・関心のある題材の下，児童がやってみたいと思う活動を設定することが大切であり，１単元でどのような力を付けるのかを考えて活動を組み立てることが大切であると述べている。

そこで，外国語活動において，児童の興味・関心に基づいた活動を単元のゴールの活動として設定し，児童が単元のゴールに活動に向けて興味・関心を高めながら，必然性のある学習に取り組むことができる単元づくりを行うことが大切だと考える。

文字の学習についてアレン（2013）は，カードが不可欠であると述べている。これは，カードを用いた学習は，カードに書かれた文字を視覚的に捉え，音声と文字の関係に気付く多様な活動を設定することができるためと考える。

これらのことから，本研究では，身近にあるアルファベットに興味付けを行った上で，身近にあるアルファベットを読んだり書いたりすることができるよう，英語カルタを作ってカルタ遊びをするという単元のゴールの活動を設定する。

そして，単元のゴールの活動に向けて，英語の音声や文字を認識する活動を行う。単元のゴールの活動では，まず，グループで英語カルタを作成する活動を設定する。グループ活動において，これまで学習した単語や，児童が集めた身近な単語の中から単語を選択し，英語カルタを作成することで，児童同士で，単語の発音の仕方や書き表し方を学び合うことができるようにする。その後，作成した英語カルタをグループで紹介し合い，それを使ってカルタ遊びをするというコミュニケーション活動を行う。児童は，英語カルタを作成し，作成した英語カルタを紹介してカルタ遊びをする中で，英語の音声や文字の認識を深め，身近な単語の音声と文字の関係に自然と気付くことができると考える。

このような単元づくりを行うことで，児童が文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむことができるようにする。

そこで，本研究の構想図を図１に示し，単元計画を次頁図２に示す。

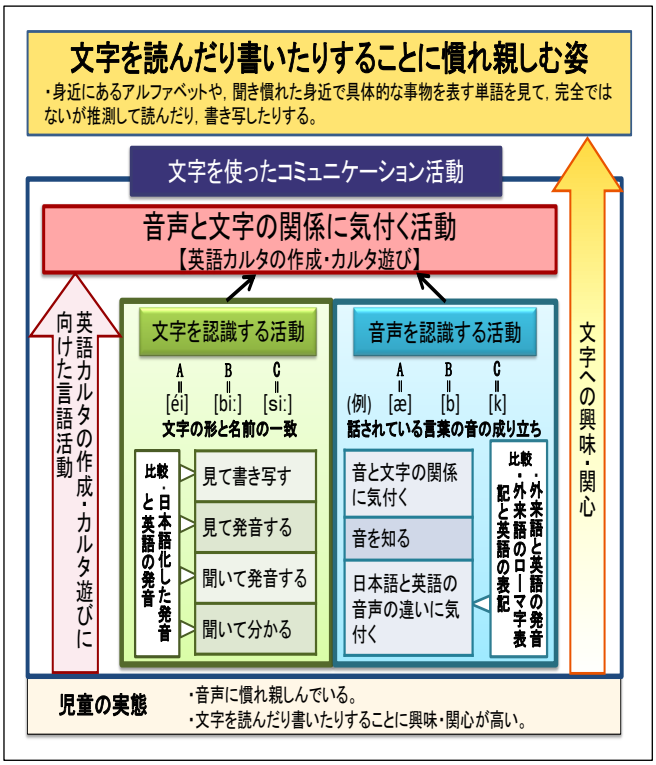

図１　本研究構想図

Ⅲ　研究の仮説及び検証の視点と方法

１　研究の仮説

日本語と比較させて英語の音声や文字を認識する活動を取り入れた単元づくりを行えば，児童は英語の音声や文字を認識し，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむことができるであろう。

２　検証の視点と方法

検証の視点と方法について，表３に示す。

表３　検証の視点と方法

検証の視点		検証の方法
日本語と比較させて英語の音声や文字を認識する活動を取り入れた単元を通して，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむことができたか。	①日本語と比較させて英語の文字を認識することができたか。	・振り返りシート ・行動観察
	②日本語と比較させて英語の音声を認識することができたか。	・振り返りシート ・行動観察
	③文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむことができたか。	・事前・事後アンケート ・振り返りシート ・行動観察

	目標(○)	主な活動		活動の種類 聞	話	読	書	日本語と英語の比較と児童の気付き	【観点】評価規準
1	○身の回りにたくさんのアルファベットが使われていることに気付き，A～Z のアルファベットの大文字とその読み方を知る。	単元のゴールの活動の設定	・アルファベットクイズ ・身の回りのアルファベット探し ・ポインティングゲーム ・ゴールの活動の話合い	○		○	○	・ローマ字読みと英語読み ・ローマ字と英語は読み方が違うみたいだ。	【気】身の回りには，たくさんのアルファベットが使われていることに気付いている。
2	○アルファベットの大文字とその読み方を一致させ，アルファベットを読んだり書いたりすることに慣れ親しむ。 ○自ら進んで欲しいアルファベットカードを尋ねたり答えたりしようとする。	単元のゴールの活動に向けた言語活動 英語の文字を認識する活動	・ポインティングゲーム ・チャンツ ・アルファベットカルタ ・名前読み言葉集め ・名前読み言葉書き	○ ○ ○	○ ○	○ ○	○	・日本語化した発音と英語の発音 ・ＢとＶがよく似ている。間違えないようにしよう。 ・ＬやＭやＮの正しい発音は日本語の発音と違う。	【慣】アルファベットの大文字とその読み方を一致させ，アルファベットを読んだり書き写したりしている。 【コ】自ら進んで欲しいアルファベットカードを尋ねたり答えたりしようとしている。
3	○アルファベットの大文字とその読み方を一致させ，アルファベットを読んだり書いたりすることに慣れ親しむ。 ○欲しいアルファベットカードを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。		・チャンツ ・アルファベットパズル ・アルファベット順番並べ ・アルファベットビンゴ ・チェーンゲーム	○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○	・ＶとＺは，今まで言っていた言い方と違っている。	【慣】アルファベットの大文字とその読み方を一致させ，アルファベットを読んだり書き写したりしている。 【慣】欲しいアルファベットカードを尋ねたり答えたりしている。
4	○アルファベットの名前とは別の音に気付く。	英語の音声を認識する活動	・外来語の発音と英語の発音の比較 ・始まりの音 ・アルファベットジングル ・アルファベットリスニングクイズ ・単語カルタ	○ ○ ○ ○	○	○ ○	○	・外来語の発音と英語の発音 ・外来語のローマ字表記と英語の表記 ・Ｓだけで「ス」と読むんだ。 ・ポストはＰの文字かな。 ・英語にはアルファベットの名前とは違う読み方がある。	【気】アルファベットの名前とは別の音に気付いている。
5	○自分から進んで知りたい単語の読み方や意味を尋ね，友達に伝えようとする。 ○カルタにする単語を読んだり書き写したりすることに慣れ親しむ。	音声と文字の関係に気付く活動	・アルファベットジングル ・英語カルタづくり	○	○ ○	○	○	・ローマ字読みと英語読み ・英語はローマ字と文字の並び方が違う。 ・母音がついていない文字も読むんだ。	【コ】自分から進んで知りたい単語の読み方や意味を尋ね，友だちに伝えようとしている。 【慣】単語を読んだり書き写したりしている。
6	○身近な単語を読むことに慣れ親しむ。		・アルファベットジングル ・英語カルタ遊び	○	○ ○	○			【慣】声に出して身近な単語を読んでいる。

図２　“Hi，friends！１”Lesson６　「英語カルタを作って遊ぼう」単元計画

Ⅳ　研究授業について

○　期　間　平成28年12月５日～平成28年12月20日

○　対　象　所属校第５学年（１学級31人）

○　単元名　“Hi，friends！１”Lesson６
　　―　英語カルタを作って遊ぼう　―

○　目　標

・積極的に欲しいものや知りたいことを尋ねたり答えたりしようとする。

・欲しいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。

・身近なアルファベットや音声で慣れ親しんだ身近な単語を読んだり書き写したりする。

・身の回りにはたくさんのアルファベットが使われていることや日本語と英語の音声の違いに気付く。

Ⅴ　研究授業の分析と考察

本研究は，日本語と比較させて英語の音声や文字を認識する活動を取り入れた単元を通して，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむことができたかについて，次の３点の分析・考察を行う。

１　日本語と比較させて英語の文字を認識することができたか

(1) 振り返りシート

英語の文字を認識する活動を行った第２時と第３時の英語の文字を認識することができたかという質問項目に係る結果を図３に示す。

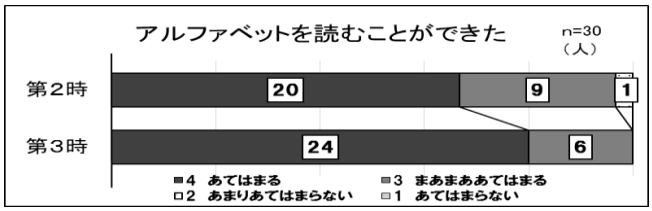

図３　英語の文字を認識することができたかという質問項目に係る結果

図３から，第２時では29人が「あてはまる」「よくあてはまる」（以下，肯定的回答とする。）と回答し,第３時では30人全員が肯定的回答をしており，アルファベットの文字の形と名前を一致させていることが分かる。

さらに，第２時のアルファベットの名前に関する音声面についての主な児童の記述を次に示す。

- 日本語と英語ではアルファベットの言い方がちがっているからよく聞いて覚えたい。
- ＶとＺは，今まで自分が思っていた言い方と，ちがうことが分かった。
- ＢとＶをまちがえずに言えるようにしたい。
- ＬとＭとＮの発音がよく似ていたけど，ちがいがだんだん分かってきた。

第２時のアルファベットの名前に関する音声面についての主な児童の記述

このことから，日本語と英語の音声面の違いに気付き，正確な発音を意識してアルファベットの文字の形と名前を一致させていることが分かる。

(2) 個の変容

図３の第２時で，「アルファベットを読むことができた」に対して「あまりあてはまらない」と回答したＡ児は，ＣＤ等のアルファベットの名前読みの言葉を集める活動では，アルファベットカードをもっている児童の所へ積極的に何度も行って，普段からよく使っている「ＯＫ」「ＰＫ」「ＭＶＰ」というアルファベットカードを集め，書き写していた。第３時の，ＡからＺまで声に出してアルファベットの名前を言いながらアルファベットカードを順番に並べる活動では，ペアで１文字ずつ交代して並べていくことができ，Ｌで少し迷う様子が見られたが，隣の児童が「Ｌサイズ」とヒントを出したことで，Ｌのカードを選ぶことができた。そして，第３時の授業後の振り返りシートには，「いろんなゲームをして，アルファベットが分かるようになった。」と記述している。Ａ児は，第２時の時点ではアルファベットを読むことに，まだ自信をもつことができてはいなかったが，第２時，第３時で様々な活動を積み重ねることで，アルファベットの文字の形と名前を一致させていることが分かる。

これらのことから，英語の文字を認識する活動の中で日本語と比較させたことで，児童が正確な発音を意識しながら，英語の文字を認識することができたといえる。

２　日本語と比較させて英語の音声を認識することができたか

(1) 振り返りシート

英語の音声を認識する活動を行った第４時と第５時の，英語の音声を認識することができたかという質問項目に係る結果を図４に示す。

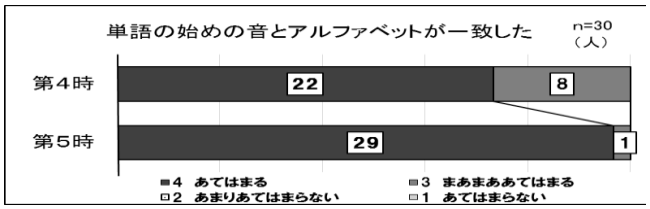

図４　英語の音声を認識することができたかという質問項目に係る結果

図４から，第４時，第５時ともに30人全員が肯定的回答をしており，「あてはまる」と回答した児童も22人から29人に増え，アルファベットの音と文字の関係に気付いていることが分かる。

次に，英語の音声への気付きに関する児童の記述をまとめたものを表４に示す。

表４　英語の音声への気付きに関する児童の記述

アルファベットの音への気付き	・ローマ字は必ずＡＩＵＥＯを入れないといけないけど英語はないものがある。 ・英語は文字一つで読む時もある。 ・ポストゥと短くなっている。 ・アルファベットには名前とはちがう音があることが分かった。 ・音の一つ一つが，自分が思っていた発音とちがっていた。
アルファベットの音と文字の関係への気付き	・頭文字の音はアルファベットの読み方と似ているところがあった。 ・ジャムなのにＪは「ジュ」と読むことにおどろいた。 ・「ＨＡＴ」のＨは「ハッ」と発音することが分かった。

表４から，外来語と英語の発音を比較させたことで，日本語と英語の音声面の違いに気付いていることが分かる。また，聞き慣れた身近な単語の始まりの音を聞き取る活動，単語のカルタ活動等，英語の音声への気付きを促す活動を行ったことで，児童が英語の音声に気付いていることが分かる。

(2) 行動観察

単語の音声を聞いて始まりの音に対応する文字を書き写し，意味とつなげる活動では，ＪＴＥの発音を聞いて，27人の児童が音に対応する文字を書き入れることができた。残りの３人の児童は，始めは間違っていたが，教師が隣で始まりの音を強調して発音したことで，正しい文字を選んで書き写すことができた。３人のうちＢ児は「始めの音をよく聞いたらアルファベットが分かった。」と記述し，Ｃ児は「始まりの音はアルファベットの名前と似ているところがあった。」と記述していた。このことから，アルファベットの音に気付いていることが分かる。

これらのことから，日本語と比較させて英語の音声への気付きを促す活動を行ったことで，児童が英語の音声への気付きをつなげて，英語の音声を認識することができたといえる。

３　文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむことができたか

(1) 振り返りシート

第４時から第６時の文字を読むことに慣れ親しむことができたかという質問項目に係る結果を図５に示す。

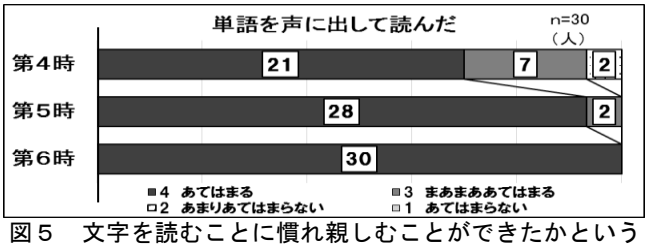

図５　文字を読むことに慣れ親しむことができたかという質問項目に係る結果

図５から，学習が進むにつれて，肯定的回答が増えている。第６時では，全員が「あてはまる」と回答していることから，文字を読むことに慣れ親しんでいることが分かる。

また，第６時の活動後の振り返りシートの児童の主な記述を次に示す。

振り返りシートの記述から，単語の一部の音を基に，推測して単語を読んでいることが分かる。

・単語の始めの音をよく聞いたら，単語が分かった。
・頭文字が言えたら，どんな言葉か分かった。
・最初の文字に注目してカルタの札を取った。
・アルファベットの音が分かれば単語がよく分かった。
・発音をよく聞いて，文字全部を読んで取った。
・単語の読み方のコツが分かった。

第６時の振り返りシートの児童の主な記述

(2) 行動観察

第５時のカルタを作成する活動では，各グループで，児童が互いに単語の発音の仕方や書き表し方を教え合う姿が見られた。そして，26文字のアルファベットから始まる様々な単語の英語カルタを作成することができた。児童が作成した英語カルタを図６に示す。

図６　児童が作成した英語カルタ

Ａグループでは，カルタにする単語を選択する際に，単語の綴りを空書きしながら伝えている姿が見られた。また，カープの綴りを誤って「ＣＡＲＴ」と書いていた児童に対し，「カープだからＰだよ。」と伝える姿が見られ，音声と文字の関係に気付いて書き写していることが分かる。

以上のように，振り返りシートや行動観察から，児童は，英語の音声や文字の認識を更に深め，アルファベットの音を基に，単語の音声と文字を結び付けて，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむことができたといえる。

(3) 文字への興味・関心

事前アンケートで，文字への興味・関心が低かったＡ児の振り返りシートの記述をまとめたものを表５に示す。

表５　Ａ児の振り返りシートの記述

第１時	日本語と英語は読み方や書き方が違うから難しそう。
第２時	アルファベット26文字全て入れたカルタを作りたい。
第３時	アルファベットの名前ではない読み方で読めるようになりたい。
第４時	少し英語が読めるようになった。
第５時	みんなで見付けた英語の読み方が分かった。コツを使ってたくさんカルタを取りたい。
第６時	始めは難しいと思ったけど，だんだん英語が分かってきて，新しい学習ができてよかった。

表５から，Ａ児は，授業が進むにつれて英語の音声や文字を認識したことで，文字への興味・関心が高まっていることが分かる。

次に，事前・事後アンケートによる，英語を読んだり書いたりすることへの興味・関心に関する児童の自己評価を図７，図８に示す。

図７　英語を読むことへの興味・関心に関する児童の自己評価

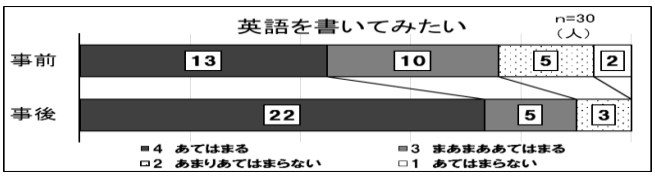

図８　英語を書くことへの興味・関心に関する児童の自己評価

図７と図８から，授業後には，音声と文字が結び付くようになったことにより，英語を読んだり書いたりすることへの興味・関心が高まっていることが分かる。図７の事前で「あてはまらない」と回答したＡ児は，事後には「あてはまる」と回答し，その理由として,「カルタができて達成感があったから。これから英語の本を読んでみたい。」と記述していた。また，図８の事前で「あてはまらない」と回答した２人の児童は，「まあまああてはまる」と回答し，興味・関心が高まっている。一方，事前で「あまりあてはまらない」と回答した５人のうち３人は，事後も変わらず「あまりあてはまらない」と回答している。これらの児童は，普段から書くことに抵抗感をもっており，アルファベットや単語を書き写すことに慣れ親しむことはできたが，英語を書くことへはまだ抵抗感があると考える。

これらのことから，児童は単元のゴールの活動へ向けて，英語の音声や文字を認識する活動を行うことで，文字への興味・関心を高め，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむことができたと考える。そして，本単元を通して，書くことへの多少の抵抗感が残るものの，更に英語を読んだり書いたりすることへの興味・関心を高めていると考える。

以上のことから，日本語と比較させて英語の音声や文字を認識する活動を取り入れた単元づくりは，児童が英語の音声や文字を認識し，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむために有効であったといえる。

Ⅵ　研究のまとめ

１　研究の成果

本研究において，日本語と比較させて英語の音声や文字を認識する活動を取り入れた単元づくりを行えば，児童は英語の音声や文字を認識し，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむことができることが分かった。

２　研究の課題

○　本研究における文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむ姿は見られたが，英語を書くことへは，まだ抵抗感をもつ児童もいる。今後，児童の興味・関心に基づいて，丁寧に書き写したり正確に書き写したりさせ，「書くこと」に自信をもてるよう指導を工夫する必要がある。

○　今後は，児童の負担も考慮し，「話すこと」「聞くこと」との関連を図りながら，小文字を含めた文字の系統的な指導の研究を進めていく。

【注】

(1) 中村典生（2008）：「CHAPTER４－５　小学校での文字指導について」『現場の先生をサポートする小学校外国語活動実践マニュアル』旺文社p. 114を参照されたい。

(2) アレン玉井光江（2013）：『リテラシーを育てる英語教育の創造』学文社p. 115を参照されたい。

【引用文献】

1)　文部科学省（平成28年）：『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』p. 83

2)　文部科学省（平成27年）：『教育課程企画特別部会　言語能力の向上に関する特別チーム（第１回，平成27年10月22日）における主な意見』p. ３

【参考文献】

文部科学省（平成28年）：『外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ』

文部科学省（平成26年）：『平成26年度小学校外国語活動実施状況調査』

平田和人（2008）：『平成20年改訂中学校教育課程講座外国語』ぎょうせい

西尾由里（2015）：「第１部　第４章　音声習得のための文字学習のすすめ」『小学校英語教育　授業づくりのポイント』ジアース教育新社

畑江美佳（2015）「小学校でどのように文字を導入するか」『英語教育』大修館書店

アレン玉井光江（2010）：『小学校英語の教育法　理論と実践』大修館書店

赤沢真世（2016）：「音と文字をつなげる自主制作ワークブック」『英語教育』大修館書店

白井恭弘（2012）：『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店

直山木綿子（2013）：「外国語活動における授業のポイント」『小学校外国語活動　イラストで見る全単元・全時間の授業のすべて』東洋館出版社